第４回秋田市総合計画・地方創生懇話会会議録

日　時　　平成２８年２月１６日（火）午後４時～午後５時１０分

会　場　　秋田キャッスルホテル

出席者

秋田市総合計画策定懇話会委員（１８名中１３名出席）

三浦潔委員、進藤史明委員、山口邦雄委員、柴田誠委員、小国輝也委員、佐藤裕之委員、
椙本歩美委員、境田未希委員、小野泰太郎委員、野口良孝委員、山﨑純委員、
菅生紀光委員、田口清洋委員

市側

石井副市長、鎌田副市長、企画財政部長、企画財政部次長、総務部次長、市民生活部次長、
福祉保健部次長、保健所次長、子ども未来部次長、環境部次長、商工部次長、農林部次長、
建設部次長、都市整備部次長、議会事務局次長、教育委員会次長、消防次長、上下水道局次長、
企画調整課長、人口減少対策担当課長、企画調整課参事、企画調整課長補佐

次　第

１　開会

２　議事

(1) 次期総合計画推進計画について

３　閉会

第４回懇話会会議録

１ 開　会　　（省略）

２ 議事

議事(1) 次期総合計画推進計画について

会長　議事に入る前に、「秋田市人口ビジョン」と「秋田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定を前倒しした経緯について事務局から説明をお願いする。

事務局　「秋田市人口ビジョン」と「秋田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」については、当初、本日の懇話会で修正案を示し、意見をいただいた上で、３月中に策定する予定で作業を進めてきた。

しかしながら、政府が昨年 11 月末、１億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策をとりまとめ、この中で地方版総合戦略に基づく先駆的取り組みを支援する考えが示された。

その後、これを受けて新たな交付金が創設されることがわかり、情報収集を進めた結果、本市としては、この新たな交付金の活用に向け、人口ビジョンと総合戦略を前倒して策定する方針を固めたものである。

このため、各委員には 12 月 14 日付けで修正案を送付し、意見をいただいたところである。本日配布した人口ビジョンと総合戦略の完成版は、いただいた意見を可能な限り反映させた上で、庁内の手続きを経て、先週２月 10 日付けで策定したものである。

会長　交付金を得るためには、早めに決定する必要があったということか。

事務局　必ずしも戦略が策定済みでなければならないということではないが、戦略に位置付けられた、ないしは位置付けられる予定である事業という条件が付いている。

加えて、28 年度当初予算事業の前倒しをして、今年度の２月補正で議会に審議していただく必要があることから、戦略を前倒しして策定するべきという判断に至ったものである。

会長　他に質問はないか。

委員　総合戦略の９ページに「首都圏等修学旅行誘致事業」とあり、秋田市への新しい人の流れを作るという意味で、柱の一つだろうと思われるが、現状で実際どれくらい首都圏から修学旅行が来ているのか教えてほしい。また、誘致に向けた自信のほどを教えてほしい。

事務局　調査したところ、現状で実績は見当たらなかった。こういった意味からも秋田市の魅力を再発見して磨き上げ、首都圏の子どもを秋田市に招き、リピーターと

なってもらえれば、秋田市の大きなＰＲとなる。さらには交流人口拡大にもつながるものと考えており、積極的に取り組んでいきたいと考えている。

会長　続いて、議事に入る。次期総合計画推進計画について、事務局から説明をお願いする。

事務局　（資料１に基づき説明）

会長　新規事業あるいは成長戦略事業のマークがついて、だいぶ分りやすくなり、また、市の考え方が把握しやすくなったと思う。

それでは意見交換に入る。まず総合計画については、基本的な考え方や取組の方向性などをまとめた基本構想が昨年12月に議会で議決されて完成したとのことであるが、今回の推進計画はそれに基づいて具体的な取組・事業を定めるものとなる。

事前配布された推進計画の修正案では、各取組・事業の28年度の予算額がまだ入っていないが、その後、市内部で整理が進められ、本日配布された参考資料３の「平成28年度当初予算案の概要」を見ると、予算額のほか、新規事業や成長戦略事業などの区分がわかるようになっている。

間もなく市が議会に諮り、議決を経て、実施に移していくという段階になっているので、本日の会議で、予算や事業の内容を修正することはできないが、計画期間は５か年あるので、29年度以降も見据えて意見をいただければと思う。

委員　農林と観光の部分で、例えば26ページに６次産業化、30ページに交流人口の拡大など、組織としては農林部と商工部に分かれていると思うが、来年度は観光文化スポーツ部ができて、縦割りを横に広げるという意味で良いことだと思う。

特に農商工連携と交流人口拡大については、リンクするところもあるのではないかと思っており、具体的には観光物産課と農林総務課の取組もつながっていくと、もっとパワーアップすると感じている。

いずれにしろ、人を呼び込んで外貨を獲得するという視点では、農商工連携についても、ただ農産物の付加価値を高めて製造して終わりではなく、その先の市場開拓や、それを県外に売り込むということにつながっていくとさらに有効ではないか。６次産業化だけで終わってしまうと、秋田市にお金を呼び込めないと思うので、そこにぜひ注力してほしい。

観光については、コンベンションの強化が重要だと思っており、目標値も32年度に３万８千人以上まで増やすとしているが、竿燈まつりを中心とする８月に一極集中というのが長年の現状であり、他の時期にもまんべんなく呼び込むことができるかということが、観光客数や宿泊客数を増やす一番のポイントだと思う。

そういった意味で、先程議論した首都圏からの修学旅行生の呼び込みというのは、唐突な感じもしたが、そういった新しい切り口を考えなければ、宿泊客を増やすのは難しいと考えている。

ただ、教育旅行のマーケットが縮小し、また環境が変わって、今は公立高校で

も飛行機も使え、海外にも行けるようになっている中で、さらに、今年は函館新幹線の開業も見込まれており、その中で秋田市に呼び込むには、体験プログラムの充実が重要だと思うので、実現に向けて検討をお願いしたい。

また、移住人口を増やすことも一つの大きな視点になっているが、どうしたら秋田に住みたいかを考えると、食べ物がおいしいとか、生活環境がいいとか、教育や医療環境がしっかりしているということが重要な要素だと思う。

教育に関しては、秋田県の教育レベルが高いということで、ここ数年、教育視察が相当入ってきているので、かなり進んでいると思うし、医療についても秋田市に関しては医療体制が整っていると思う。データによると、がんは未だに秋田県や秋田市の死亡率が高いのだが、大腸がんなどの死亡率が減ってきており、例えばがんの治療などで秋田が先駆的なことをやっていると、研修医の受け入れや患者さんも含めた医療関係の方の呼び込みにもつながると思うので、教育と医療を秋田市の強みとしていけば、移住の促進にもつながると思う。

事務局　農商工の連携に関しては、例えば 31 ページの 11 番の「観光プロモーション」や 12 番の「オール秋田『食と芸能』大祭典」は竿燈を中心としたプロモーションであるが、その際は秋田市の農産加工品等もＰＲしており、今後も食をツールとして使っていくことを考えている。

また、販路拡大に関しては、例えば 20 ページの１番に「対外経済交流事業」、２番に「海外展開促進事業」を記載しており、海外で製品や加工産品を紹介し、今後の展開につなげていこうという積極的な商工業者の方にブースの出展等を紹介しながら参加していただくといった事業も載せている。

また、通年での集客に関しては、例えば 30 ページの４番に「ギュギュっとあきた週末イベントリレー開催経費」を記載しており、これは９月から 10 月にかけて、地元の商工業者の方が中心となり、イベントを開催して集客促進を図るものである。また、春については、31 ページの 12 番に記載している「オール秋田『食と芸能』の祭典」などを考えており、シーズンを拡散しながらお客さんを呼び込み、地域の経済発展につなげていきたいと考えている。

石井副市長　農商工連携と観光文化スポーツの話であるが、今回の成長戦略５本の内の２本にこれを位置付けている。その具体的な手段として、農林部と商工部を産業振興部にする。また、観光、文化、スポーツを観光文化スポーツ部にする。もうすぐ新庁舎ができるが、産業振興部と観光文化スポーツ部はワンフロアなので、組織的には非常につながりやすい環境になる。

また、通年観光の話であるが、竿燈の前の春先には県内市町村に参加いただき、「オール秋田『食と芸能』大祭典」を開催し、来年のディスティネーションキャンペーンをにらんで、３年間継続して、春先の大きなイベントにしたい。来年はねんりんピックの本番もあるので、年間を通じて、四季それぞれにコンベンションを誘致しながら、通年型の観光を狙っていきたい。

教育とがんの話もあったが、がん検診はこれまで５年に１回無料で行っていた検診を、自己負担５百円や千円で２年に１回とするなど、がん検診を受けやすい

環境を作るため予算を大幅に増額した。

委員　観光に関して、秋田市の最大の売りは竿燈まつりであり、通年観光を考えると８月だけでは物足りないので、例えば竿燈を通年体験できる場所として、民俗芸能伝承館があるが、修学旅行の誘致や通年観光を考えると不十分ではないか検討する余地があるのではないかと思う。

石井副市長　民俗芸能伝承館は通年でできるが、会議やイベントで集客した場合は、実行委員会に依頼し、エリアなかいちで竿燈を上げてもらっている。常設の施設を大きくするのは難しいと思うが、100 人規模のまとまった団体客には積極的にエリアなかいちなどのスペースで竿燈を上げているので、そういう形で対応したいと思っている。

委員　首都圏等からの修学旅行の誘致について、以前、秋田港の環境整備という議論の中で、フェリーを使って、例えば北海道から修学旅行を呼んだらどうかという意見も出ていたが、首都圏だけでなく、交通機関も含めてターゲットを考えた方がいいのではないか。

また、秋田港には多くの大型クルーズ船が来るので、そういった方々がまち歩きをする際には、Wi-Fi の環境を整備して、個々の店の情報も含めて、情報を発信することが需要だと思うので、外国人対応の Wi-Fi の環境整備について、推進計画の中でどのように扱われているのか教えてほしい。

また、千秋公園は秋田市の顔であり、県の顔でもあると思うので、千秋公園というものを大きく扱った観光ということを進めていくべきではないかと思う。当然そこには Wi-Fi の整備も含まれるが、そういったことについて、この計画の中ではどう扱われているのか、この３点についてお聞きしたい。

事務局　北海道からのフェリーでの修学旅行については、関係機関との協議など、もう少し時間が必要かと思うので、今後の検討課題とさせていただきたい。

Wi-Fi 整備については、まず観光客が宿泊する施設や主な観光施設に Wi-Fi の整備を進めている。中心市街地は民間の商店等で対応できる状況となっており、観光施設については、32 ページの 21 番「インバウンド誘客促進事業」で、更なる Wi-Fi 整備も含め、外国表記での情報発信などに取り組んでいく。

事務局　千秋公園の整備、位置付けについては、32 ページの 20 番に「千秋公園整備事業」を記載している。

千秋公園については、城跡公園としての歴史的背景や自然環境を保全しながら、再整備に努めているところである。このような中、千秋公園を取り巻く環境が、エリアなかいちの整備や、中心市街地と連携したイベントの開催、県・市連携文化施設の建設計画など、大きく変化している。

当然のことながら、中心市街地のにぎわいの創出に向けて、千秋公園も一つの核として１人でも多くの市民や観光客の皆さんが訪れて、親しまれる公園を目指

して、城跡公園としての原風景を残しつつ、新たな魅力ある施設の整備といった所にも視点をおきながら、再整備に努めていきたいと考えている。

会長　時間の制約もあるので、さらに健康や福祉、文化などを含めて、意見をいただきたい。

委員　安倍政権の発足以来、健康寿命の延伸は大きなテーマになっているが、国が定めた「健康日本 21」には活動の指針となる「ソーシャルキャピタル」という新しい概念がある。その中で、これからは地域活動を通じて、健康寿命の延伸をどう作っていくか、つまり本来一人ひとりの人間が持っている生きる力をどのように発揮させるかということと、それをサポートする地域社会のつながりを作っていくことが、これからの健康寿命延伸活動になると思う。

例えば成長戦略の中に健康長寿社会づくりとあり、また、高齢者の福祉や健康というのは計画の中に網羅されているが、これからの活動の仕方としては、地域活動を通じて健康長寿社会をつくる視点が必要だと思う。

委員　私の方からは２つの事業についての質問と１点意見させていただきたい。

まず 89 ページの 42 番「妊娠期からの相談支援事業」について、これは国の方で進めている子ども・子育て支援新制度の中にも出ており、その必要性が重要視されているものであるが、県内では男鹿市が既に始めている事業である。

秋田市では、子ども未来センターや各市民サービスセンター、保健所で行う相談支援事業などが既にあるが、それらとどのように差別化を図っていくのか、また、秋田市の独自性をどのように打ち出していくのか具体的に教えてほしい。

次に、92 ページの１番「ふたりの出会い応援事業」について、出会いの場づくりを進めるとあるが、最終的には結婚したい若者が結婚できることが重要だと思うので、この事業に参加した人をどこまでも追いかけて、結婚したかどうかを確認するのかどうか、最終的な着地点がどこなのかということを教えていただきたい。

最後に１点意見であるが、例えば２ページや 12 ページの体系図の右側の方にページ数があると見やすいと思うので、検討いただきたい。

委員　全体を通じて、個別の事業はよくできあがっていると思うが、一方で施策の垣根を越えて、これとこれを一緒にやればもう少し規模感が出るものが多いと感じる。施策の垣根を越えるには統括的な見方をする人の配置が重要だと思う。また、庁内の総合プロデューサー的な機能も必要だが、合わせて、外では誰がどういう活動をしているかということも目利きができるような人を配置し、この予算、事業は誰と組めばいいかを指定するといったことを基本的な考え方にすれば、物事がうまく進むと思う。

例えば、秋田市は美術大学を持っているので、工芸品の振興やまちづくりをすべてアートという観点で引き込むなど、そういった考え方もあるのではないかと思う。

また、例えば30ページに「工芸振興事業」とあるが、今の時代、工芸品は非常に注目されている。工芸品が持っている歴史やストーリーが大事であり、それを発掘し、コンテンツにしてＰＲできる人間がいるかどうかで、同じ物でもＰＲできるかどうか変わってくると思う。例えば銀線細工や秋田黄八丈など、様々な工芸品があるが、どれほど素晴らしいものなのか、歴史的な検証を行うため、美術大学の先生方にも能力を発揮していただくなど、コラボレーションが重要だと思う。

また、例えば27ページの７番に「都市・農村交流促進事業」とあるが、都市と農村といった場合に、秋田市という都市と農村の共生というのは具体的に何を指すのか。そういったことを考えると、秋田市の中だけで完結できるのか。雄和や河辺といった地域もあるが、例えば先行して取り組んでいる五城目町と手を組んでみるなど、そういった広域連携もできるような目を持ったプロデューサーのような方を配置するのが、このような施策が成功するポイントだと思う。

また、67ページの５番に「歩くべあきた健康づくり事業」とあるが、冬は厳しいので、これもコラボレーションが必要だと思う。例えば、朝の５時から７時頃まで、歩いている方が非常に多いが、途中で立ち寄れるフードステーションやドリンクステーションのようなものを設置し、ボランティアが交代で毎朝いるといった仕組みを作ってはどうか。

会長　地域活動の重視、妊娠期の相談、シングルズカフェの着地点、施策の連携、外の動きがわかるコーディネーターといった話があったと思うが、事務局からコメントはないか。

事務局　まず、89ページの42番「妊娠期からの相談支援事業（秋田市版ネウボラ）」については、事業名にもあるとおり、妊娠期から出産、子育て期にわたって相談を受けたり、様々な支援をしていこうという事業である。

子ども未来センターでは、これとは別に、利用者支援事業を今年度から展開している。これは既に子どもがいる方で、様々な子育てサービスを受けたい、また、自分のライフスタイルに合うのはどのようなものかといった相談に応じて、マッチングするというものである。

ネウボラの方は、妊娠届を出された時点からさまざまな支援を展開していくということで考えており、まずは来年度、保健所内にある子ども健康課に、専任の保健師等の職員を配置して展開しようとするものである。

秋田市の独自性として、来年度からは７つの市民サービスセンターがそろうが、それぞれの市民サービスセンターにある子育て交流広場と棲み分けをせず、ネウボラを市民サービスセンターの方に展開していければと考えているところである。

また、92ページの１番「ふたりの出会い応援事業（シングルズカフェ秋田）」について、追跡調査という話であったが、どうすればできるのか課題として取り上げているところである。開催当日は、連絡先の交換をしたかなどのアンケート調査をしているが、一定期間を置いて、その後お付き合いされた方はいるかといっ

た追跡調査になると、プライベートなこともあるので、あまりしつこく調査すると逆に参加者が減ってしまうということもあると思うが、課題として捉えている。

事務局　健康長寿社会づくりという話が出たが、これまではどちらかというと、例えば市の保健師などが地域に出向き、高齢者や一般の方たちに保健指導的な観点から行っていたが、今後の高齢化社会を考え、一部の専門職だけが行うのではなく、地域の住民が主体的に自分の健康を保持し、あるいは介護予防的な観点から活動に取り組んでいただくといったことを目指して取り組んでいきたいと考えている。

そのため、例えば83ページの５番「高齢者コミュニティ活動創出・支援事業」は、今年から３カ年の事業で、高齢者の主体的な活動を作っていこうと考えている。また、84ページの20番「高齢者生活支援体制整備事業」では、現在４つの地区をモデル地区に指定し、その中で地域住民を巻き込んだワークショップ形式で自分達の地域の課題は何か、この地域に足りないものは何かといった話し合いをしている。来年度からはその４地区に生活支援コーディネーターを配置し、その方たちを中心に具体的な介護予防、健康づくりの活動に自主的な形で取り組んでいただき、さらには生活支援サービス提供までできればという形で取り組んでまいりたいと考えている。

事務局　「健康日本21」に関して、秋田市でも「健康あきた市21」という計画を平成15年度から作っており、現在第２次の計画に入っている。平成25年度から34年度までの10年間を第２次として、来年度も66ページに記載している「市民健康フォーラム」などに取り組みながら、中間評価のためアンケート調査等で市民の意識を把握していきたいと考えている。

また、先ほどお話があった地域の健康づくり活動だが、地域で健康増進活動を行っている地域保健推進員を保健所の保健師がサポートしている。

また、67ページの５番「歩くべあきた健康づくり」は好評であり、来年度も引き続き事業を展開したいと考えている。その中で様々なイベントとのコラボレーションを考えていきたい。また、早朝からの飲み物の供給の実施などは厳しいと思うが、なんとか出来る方法を考えていきたいと思う。

委員　先ほどの、地域プロデューサーないしコーディネーター的な役割といった意見に賛同する。これを実施する場合、すべて行政がやるべきとは限らず、逆に地域の方々が持っているポテンシャルを活かした方が、地域の方々の健康や生きがいにつながる。そういった施策の実施の仕方を秋田市が提示できればいいと思う。それがボランティアベースなのか、ＮＰＯの支援という形なのか、それはやりやすいところを目指すべきだと思うし、また、大学生がインターンとして社会経験を積むという形で対価をもらうという形もあるし、面白い仕組みを提示できると説得力のあるものになるのではないか。

委員　御所野学院の中高一貫校に関して、107ページの16番の部分を読むと、市とし

ては中高一貫を継続するというメッセージにも受け取られるが、その点についてはどうか。

会長　最後に石井副市長からお話いただき、この会議は終了としたい。

石井副市長　この懇話会は、昨年の６月２日に第１回を開催し、８カ月以上にわたって貴重なご意見をいただいた。

今回の新たな総合計画、人口ビジョン、地方版総合戦略は、まさにこれからの秋田市の将来を大きく左右する計画だと、市長共々そういった思いで取り組んできた。その意味では、これまでにない多くの取組を掲げたつもりであり、また、予算的にも計画的にも環境を整えたが、これをどのようにして成果につなげるかということが一番の課題だと思っている。

先ほど話があったように、執行する過程で外部人材を登用するとか、地域と共に進めるなど、事業によってそれぞれ工夫の余地があると思っている。

いずれにしても、この計画を着実に遂行することが秋田市の発展につながると思っており、また、いただいた意見を今後ともしっかりと胸に刻みながら、成果につなげたいと思っている。

３　閉会（省略）